

岡本先生の縄文時代研究について

武井 則道

この三編の論文は、必ずしも十分ではないが、岡本先生の縄文時代研究の方法論がわかるものである。

岡本勇先生は、1945年8月15日の日本の敗戦を契機に自己存在の理由を問う旅をはじめたのである。一つは自己存在を確かめるための過去の歴史への旅、すなわち考古学を学ぶ道である。1946年4月に明治大学専門部文科地理歴史科（旧制）に入学された。もう一つは人間としていかに生きるべきかという魂の彷徨である。ランケ、ドロイゼン、マイネッケ、ディルタイ、そしてニコライ・ハルトマンと遍歴していったのちに、史的唯物論にいきつかれたのである。それは学問のための学問から脱したいがためとのべられている。1953年の西川宏・李進熙両氏と書かれた「死せる神の復活」でその決意をはっきり示された。そして、それまでの全てのしがらみを断ち切って、和島誠一先生と共に歩む道を選ばれたのである。1953年11月に市原壽文氏とはかり、史的唯物論の立場で考古学を研究する会を組織した。これがのちの武蔵地方史研究会になる母体であった。こうした経緯からわかるように、岡本先生は日本の原始社会の発展の歴史を史的唯物論の立場から研究していこうとしたのである。

「労働用具」はいわば縄文時代の生産論の一部である。狩猟具、漁撈具、磨製石斧・打製石斧を取り上げている。具体的な使用法と機能についてのべ、どのような獲物（労働対象）であったかまで論じている。ただ資料的制約からどのような人間集団（労働主体）によって労働が行われたかについては十分述べられていない。先生は生産にかかわる問題についてはかなり関心を抱かれておられた。金子浩昌氏の骨角製漁具研究、松沢亜生氏の石器製作の研究などに理解をしめされ、協力を惜しまれなかった。

つぎの「縄文時代の集落をめぐる」は、1979年の秋に行われた武相文化協会主催の「南関東の縄文文化諸問題」の講演の記録である。そのために他の二編と違いすこし表現が冗長になっている。内容は集落の研究史、集落址自体の分析視点、そのための堅穴住居の復元、そして集落址相互の分析視点などについて述べられている。ただ先生が中心となって進められていた横浜市港北ニュータウン建設地域内の遺跡調査の途次であったために、集落址相互の関係や集落址と共同体の関係などについては十分に論じられていない。

「埋葬」は、1955年の時点でまとめたものである。縄文時代の埋葬遺骸は質的な差別が認められない状態で葬られており、東北日本の積石や配石をもつ墳墓について身分の相違や階級が存在を一部の人が考えているが、基本的な生産用具や多くの労働力を所有しうる権力者、すなわち支配する階級的位置にあったとはみられないと結論づけている。埋葬の研究といえども縄文時代の生産のあり方などを踏まえて考察しなければならないことを示された論文である。